

東京経済大学創立 120 周年記念展示 「東京経済大学120年と創立者大倉喜八郎」について

田 辺 可 奈

はじめに

東京経済大学の前身である大倉商業学校は、1900（明治 33）年 9 月 1 日に開校した。それから 120 年目の 2020 年、大倉集古館にて記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」が開催された。また、大倉集古館での会期終了後は、国分寺キャンパス内の進一層館で引き続き展示が行われた。

本展は、東京経済大学の創立 120 周年記念事業の一環として企画された。筆者は、2018 年 4 月から、東京経済大学史料室にて、120 周年記念展の業務に携わった。120 年史の作成にアドバイスする史料委員会顧問の村上勝彦東京経済大学名誉教授はじめ、史料室の方々に、展示構成や展示資料について、示唆や助言をいただきながら、具体的な展示計画を作成した。その展示計画については、学内の関係委員会（岡本英男学長を委員長とする創立 120 周年記念沿革史特別展示実行委員会、戸邊秀明教授を委員長とする 120 年史専門委員会、委員長名は展示開催の 2020 年当時のもの）での議論や助言を通して修正され、策定されていった。さらに展示会場である大倉集古館、及び関係諸機関にも多大な協力をいただいた上で、史料室が中心となり、展示準備が進められた。展示構成や資料選定などの展示計画案の作成の他、外部機関との資料借用に関する渉外など、120 周年展示全般の業務に携わった立場から、展示記録として拙稿を記す。

展示は、大倉商業学校を創立した大倉喜八郎の生涯と、東経大の 120 年の歴史の、大きく 2 つをテーマとした。展示資料については、同じく大倉集古館にて 20 年前に開催された 100 周年記念展示を参考にしつつ、その後の研究成果を基に、可能な限り調査を行い精査した。その調査結果については、本展のパネルやキャプションに生かされることとなったが、詳細については展示にて紹介することができなかった。また、調査をしたものの展示できなかったものもある。それらを含めて、本稿では、展示の記録として、展示概要や意図を記すとともに、いくつかの資料について詳述したい。

1. 展示概要

まず展示の基本情報を確認する。

【2 会場共通】

名称：東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」

主催：東京経済大学

展示構成：

第Ⅰ部 大倉喜八郎、その生涯と事績

1. 喜八郎 出立する
2. 喜八郎 起業する
3. 文化愛好家として
4. 喜八郎が遺したもの

第Ⅱ部 大倉商業学校から東京経済大学へ—記録と記憶でつづる 120 年—

1. 大倉商業学校の時代
2. 大倉高等商業学校の時代
3. 戦時下の学校
4. 東京経済大学の誕生
5. 高度経済成長と大学
6. 社会科学系総合大学への道

【大倉集古館会場】

日程：2020 年 10 月 3 日（土）～10 月 25 日（日）10：00～16：30（開館日数 20 日）

（休館日：10 月 5 日（月）、12 日（月）、19 日（月））

会場：大倉集古館

入館料：一般 1000 円，大学生 / 高校生 800 円，中学生以下無料

関連企画：

特別解説会（定員各回 40 名・要申込）

第 1 回 10 月 10 日（土）14：00～15：30

「大倉喜八郎の商業学校創立への思いと創立をめぐる」

講師 村上勝彦氏（東京経済大学名誉教授・公益財団法人大倉文化財団理事長）

第 2 回 10 月 17 日（土）14：00～15：00

「『大倉の夜学』と卒業生」

講師 米山高生氏（東京経済大学図書館長・経営学部教授）

展示解説会（申込不要） 10 月 9 日（金）・16 日（金）各日 14：00～

【国分寺キャンパス会場】

日程：2020年11月2日（月）～11月12日（木）9：00～17：00

（休館日：11月3日（火）、7日（土）、8日（日））

会場：東京経済大学国分寺キャンパス 進一層館1階

入館料：無料

前述したように、本展は大倉集古館での展示終了後、国分寺キャンパスでも同様の展示が行われた。ただし、国分寺キャンパスでの展示では、規模を縮小し、東京経済大学で所蔵している資料のみを展示した。展示構成は両会場とも同じである。

本展は2部構成とした。第Ⅰ部を大倉喜八郎の人生と理念、第Ⅱ部を大倉商業学校、大倉高等商業学校、大倉経済専門学校、東京経済大学と続いてきた120年の歩みをテーマに展示を行った。第Ⅰ部では、大倉喜八郎の人生を、幼少期を過ごしその思想に大きな影響を与えた新発田時代から、起業家としての事績と、その背景にあるベンチャー精神や海外への広い視野などを紹介した。また営利事業のみならず文化事業への傾注という側面についても触れつつ、本学の建学の精神の基となった喜八郎の思いを伝えることを企図した。

第Ⅱ部では、日記や聞き取り調査などから分かる個々の視点から見た学校の歴史を交えつつ、それぞれの時代の学生生活を中心に展示を行った。展示を通して、120年の学校の歴史と、その背景にある時代の変化を感じてもらうことに心がけた。

大倉集古館会場での日程は、大学創立記念日である10月23日を含む日程となっている。この日に120周年式典が行われる予定であったが、コロナ禍のため、式典は中止となった。また、コロナ禍のため、開館時間が短縮された。国分寺キャンパスでは当初学園祭（葵祭）の期間中に開催される予定であったが、葵祭はコロナ禍のためオンラインでの開催となった。

会場となった大倉集古館は、大倉喜八郎が創立した、日本で最初の私立美術館であり、大倉集古館のある赤坂葵町は大倉商業学校が開校された地でもある。特別協力団体の組織として大倉集古館の経営母体である公益財団法人大倉文化財団に、協力団体として喜八郎に縁のある企業（葵会）5社（大成建設株式会社、中央建物株式会社、特種東海製紙株式会社、株式会社ニッピ、株式会社ホテルオークラ）になっていただいた。

広報として、展覧会チラシとポスターを制作した（写真1）。これらは会期前に協力団体をはじめ関係機関や卒業生などの学校関係者に配布した。

展示会場である大倉集古館は、1階と2階に展示室、地下1階に会議室やミュージアムショップなどがある。第Ⅰ部「大倉喜八郎、その生涯と事績」を1階展示室で、第Ⅱ部「大倉商業学校から東京経済大学へー記録と記憶でつづる120年ー」を2階展示室で紹介した。地下1階には、広報課が中心となってデジタル機器を使用した展示が行われた（写真2）。

大倉集古館の1階展示室の各ケースの壁面には、B2サイズの展示解説パネルをテーマご



写真 1 120 周年展チラシ（表面）

とに設置した。パネルには、解説文だけでなく、関連する資料画像を入れ込み、展示内容を補完することを目指した。2 階展示室の各ケースの壁面には、A1 サイズの解説パネルを設置した。1 階展示室の壁面には展示する資料が多くスペースがなかったため B2 サイズとなったが、2 階展示室の展示は学校関連の写真を多く入れ込みたかったことから、2 階展示室のパネルサイズを大きくした。

展示資料に付するキャプションは、大倉集古館で通常使用する A5 サイズのものの他、縦 100 mm×横 90 mm（解説あり）、縦 35 mm×横 90 mm（解説なし）の各サイズのキャプションを独自に作成し、併用した。A5 サイズのものには、英訳を付けた。展示資料数が多く、



写真2 大倉集古館地下1階でのデジタル展示

A5サイズのキャプションを設置する什器の数にも限りがあったため、独自のキャプションも使用した。

パネル、キャプションの文章作成にあたっては、史料室内で分担執筆した。史料室内と専門委員の先生方による校正を経て、パネルは専門業者（東京スタジオ）が、キャプションは史料室内で製作した。

展示作業は、大倉集古館の担当職員とともに史料室の職員が行った。また、資料梱包と輸送、および展示業務補助は専門業者（日本通運）に委託した。壁面へのパネル設置や壁面造作などの展示造作については専門業者（東京スタジオ）に委託した。

関連事業として、特別解説会と展示解説会（ギャラリートーク）を行った。特別解説会は、企画段階では、会議室での講演と展示室での解説とを組み合わせた形式を考えていたが、コロナ禍のため展示室での解説は断念して講演会形式とし、2回実施した。両会ともほぼ満席、質疑応答も活発に行われた。また、来館者には、展示内容をまとめたA5サイズ、全20ページ、カラー版の小冊子を配布した。

大倉集古館を会場とした展示が終了後、東京経済大学国分寺キャンパスにて、規模を縮小しつつ構成は同様の展示が行われた。国分寺キャンパス進一層館1階には、常設の沿革史展示コーナーがある。通常の展示は、資料保存の観点から、ほぼ全て複製資料が展示されている。しかし今回は、展示期間が短いこともあり、既存ケース内は実物資料に展示替えを行った。その上で、展示室内及び展示室外にのぞきケース5台を配置し、併せて展示を行った。資料は、大倉集古館会場での展示資料のうち、大学所蔵の資料から一部を選択した。



写真 3 大倉集古館 1 階展示室（第 I 部の展示）

次に、大倉集古館会場での各部の展示の概要と、展示資料について紹介する。展示資料リストについては、本稿末に添付した。文中の資料については、東京経済大学以外の所蔵資料にのみ所蔵先を付した。写真を含め、所蔵先が無記名のものは東京経済大学の所蔵資料である。

2. 第 I 部「大倉喜八郎、その生涯と事績」

第 I 部は、大倉商業学校の創立者である大倉喜八郎の人生と多彩な事績をベンチャー精神や海外への広い視野といった本学の建学の精神に通じる喜八郎の信念をふまえて紹介した。その展示内容については、大倉喜八郎研究の第一人者である村上勝彦東京経済大学名誉教授の研究成果を多く参照し、ご助言をいただいた。第 I 部はテーマごとに次の 4 章に分け、大倉集古館 1 階展示室で展示を行った（写真 3）。

1. 喜八郎 出立する
2. 喜八郎 起業する
3. 文化愛好家として
4. 喜八郎が遺したもの

次に各章ごとに詳細を記す。

2-1. 「1. 喜八郎 出立する」

第Ⅰ部の第1章は、喜八郎の生まれ故郷である新潟県新発田市に残された関係資料を展示する「1-1. 新発田から江戸へ」と、数え年18歳で上京してから独立を果たすまでの関係資料を展示する「1-2. 乾物店の開店と鉄砲商への転身」の2節を設けた。本章では、これらの展示を通じて、喜八郎の商売への考え方や人生哲学が少青年時代の体験を基にどのようにして形成されてきたのかを紹介した。

この前のコーナーに導入として、大倉喜八郎夫妻像（大倉集古館蔵）を展示した。これは、喜八郎91歳の木彫像で、高村光雲、光太郎父子の合作である。喜八郎へのイメージを明確にし、以後の展示に臨場感を与えることを意図した。

「1-1. 新発田から江戸へ」では、パネルで喜八郎が影響を受けた祖父など家族関係を紹介しつつ、喜八郎が12歳から学んだ「積善堂」に関する資料を展示した。積善堂は、儒学者である丹羽伯弘が開いた私塾で、喜八郎がその思想形成の上で大きな影響を受けた陽明学を学んだ場所と言われている¹⁾。直接的に積善堂と陽明学とをつなげる資料は発掘できなかったものの、積善堂に関係するものとして、丹羽伯弘の自画自賛や塾則など貴重な資料を新発田市立歴史図書館から借用し展示することができた。また、「御出京の動機」（鈴木英介氏蔵）は、姉・貞の嫁ぎ先である間瀬屋（まぜや）（新潟湊の豪商）6代目の間瀬屋佐右衛門（さえもん）の曾孫である9代目の鈴木佐平氏が記したもので、喜八郎が出郷する経緯を伝える重要な資料であることが指摘されている²⁾。

「1-2. 乾物店の開店と鉄砲商への転身」では、上京後、丁稚奉公を経て、独立して乾物店を開き、さらに銃砲商へ転身し、起業家としての一步を踏み出すまでの青年期に焦点を当てている。商売にも正直さや信用、儉約や勤勉といった徳の実践が大切だと説く石門心学の抜き書きが注目される編書『心学先哲叢集』や、丁稚奉公時代から乾物店を営んでいたころの狂歌が掲載された狂歌集（『狂歌扶桑名所名物集』、『狂歌弓張月』）を展示した。喜八郎の狂歌は、現在残っているものは晩年のものが多く、このような若いころのものは貴重である。また、「瑞西九十番スーベル君借用金証書」「米預手形事」（ともに新発田市立歴史図書館蔵、瑞西はスイス）は、外国商人スーベルと新発田藩との借用書に喜八郎が仲立ち人として記される文書である。スーベルは喜八郎が鉄砲を買い付けていた商人の一人であり、新発田藩とスーベルを結びつける背景として、喜八郎の銃砲商としての活動があったと推測されるため、これらの資料を展示した。最後に「大倉組銃砲店広告」を展示した。扱っている商品として猟銃やその付属品を紹介しており、1892（明治25）年当時の銃砲店は猟銃を主としていたことが分かる。

2-2. 「2. 喜八郎 起業する」

第Ⅰ部の第2章は、3節にわたり、喜八郎のベンチャー精神あふれる起業について展示し



写真 4 扁額「開物成務」（大成建設蔵）の展示

た。

「2-1. 大倉組商会の設立」では、喜八郎が 1873（明治 6）年 10 月に設立した大倉組商会に関する資料を紹介した。扁額「開物成務」（大成建設蔵）は、1896（明治 29）年に台湾を訪れた伊藤博文が、大倉土木組による台湾初のトンネル工事の功績を称え、揮毫したものとされる³⁾（写真 4）。また、大倉組関わった土木建築工事として、伊東忠太が設計した喜八郎の京都別荘敷地内の望楼である祇園閣の 20 分の 1 の模型（大倉集古館蔵）も展示した。

喜八郎は、民間人として初ともいわれる欧米視察旅行を行い、そこで学んだ欧米の会社組織にならって帰国直後に大倉組商会を設立、その翌年に日本の企業で初めての外国支店をロンドンに、2 年後にアジアでは朝鮮釜山に日本で初となる支店を開設した。

「2-2. 海外への事業展開」では、喜八郎と海外との関係を示す資料を展示した。欧米視察旅行については、横浜運上所（税関）長官を経て大蔵省三等出仕となった上野景範が在英公使の寺島宗則に喜八郎を紹介した「寺島宗則宛上野景範書簡」（国立国会図書館憲政資料室・寺島宗則関係文書）を、大倉組ロンドン支店については、東京経済大学が所蔵する合名会社大倉組のロンドン支店支配人への辞令や命令書などを展示した⁴⁾。

晩年に注力した中国での事業展開については、1919（大正 8）年 10 月に、満州の本溪湖煤鉄公司を訪れた喜八郎から日本にいる大倉組副頭取の門野重九郎宛に送った「門野重九郎宛大倉喜八郎自筆書簡」（大倉集古館蔵）を展示した。

喜八郎と中国との関係は、京劇を通じた文化交流や、張作霖からの弔旗など、以降の展示理解を深めるためにも、ここで言及しておきたい事柄であった。また、喜八郎が広く海外へ

目を向けていたことは、「海外で通用する人材を育てる」という大倉商業学校の創立の精神と通じている。そのため、喜八郎と海外との関係については、1節を設けて紹介している。

「2-3. ベンチャー精神と事業の多角化」では、喜八郎が起業に関わった事業についての展示を通して、喜八郎の旺盛なベンチャー精神を紹介した。ベンチャー精神は、大倉商業学校の精神と共通する要素である。数多くの起業に関わっている喜八郎であるが、本展では、皮革業、電力、ビール製造業などに関する資料を展示した。

日本で初めて電灯が点った様子を描いた錦絵（電気の史料館蔵）は、細部まで観察することができ、実物資料ならではの迫力がある。

また、大倉組札幌麦酒醸造場に関する資料は、大倉組が単独で経営に関わっていた時期が2年と短く、関係資料が少ない中、サッポロビール博物館のご協力により、貴重な資料を展示することができた。「札幌麦酒醸造場払下げ命令書」（国立公文書館蔵）にて1886年に北海道庁から大倉組に醸造場が払い下げられたことが分かり、「大倉組札幌ビール醸造場図」（サッポロビール博物館蔵）で当時の醸造場の様子が、「麦酒醸造場引継目録」（サッポロビール博物館蔵）により道庁からの引継ぎの詳細が分かる。貴重な大倉組麦酒醸造場時代の文書である「麦酒貯蔵用水伐採の儀について」（サッポロビール博物館蔵）は、ビール貯蔵用の水を豊平川から伐採する許可を道庁に要請している。払下げの翌年、醸造場が喜八郎と渋沢栄一・浅野総一郎との共同経営になる際の「約定書」（複製）（サッポロビール博物館蔵）を展示し、醸造場の払下げから共同経営に至るまでの大筋を紹介することができた。合わせて、明治30年代のビール瓶に大倉組時代のラベル（複製）を貼付した資料も借用することができ、視覚的なイメージを展示に加えることができた。

以上、第2章では、喜八郎の事業拡大の様子を紹介しつつ、大倉商業学校の創立の精神につながる喜八郎の仕事への姿勢（ベンチャー精神、海外への広い視野）について確認した。

2-3. 「3. 文化愛好家として」

喜八郎は、狂歌人、美術収集家としての顔も持つ。晩年に中国への事業展開に傾注して以降は、文化交流による日中の友好を図った。本章では、喜八郎と文化との関わりについて3節にわたり紹介した。

「3-1. 美術品収集、大倉集古館の設立」では、文化財の海外流出を嘆いた喜八郎が美術品収集を始め、1902（明治35）年に自邸内に大倉美術館を建設、1917（大正6）年に日本で最初の私立美術館である大倉集古館が誕生した経緯を紹介した⁵⁾。「大倉邸之図」「大倉邸美術館内之図」（大倉集古館蔵）は、大倉美術館の様子を知ることができる貴重な錦絵である。画像ではなく実物資料を大倉集古館のご協力により展示することができた。着彩の部分があるようにも見受けられたが、額装のため詳細の確認ができなかった。大倉集古館の館内には、喜八郎筆の「しなものにさわりたまふな 煙草をのむこと勿れ こゝろある人」との注意書

東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」について

きが掲示されていたとも伝えられる⁶⁾。喜八郎の文化財に対する意識の高さを感じられる。

「海上日の出国」と、その由緒書き（ともに大倉集古館蔵）は、美術品の由緒が喜八郎により記録され伝わっている貴重な資料である⁷⁾。ほかに、喜八郎が中国や朝鮮で事業を拡大するのに合わせて、美術品の収集範囲も広がったことを示す資料として、「盤龍石硯」（大倉集古館蔵）を展示した⁸⁾。

「3-2. 日中の文化交流、歌舞伎と梅蘭芳の京劇」では、喜八郎が中国での事業展開を進める中で、文化で日中間の交流を企図したことを紹介した⁹⁾。1919 年（大正 8）年と 24 年の 2 回にわたり、京劇（中国の伝統芸能）の名優・梅蘭芳を招き、喜八郎が当時会長をしていた帝国劇場で来日公演が行われた。その関係資料（第 1 回来日公演時の演目のあらすじ『梅蘭芳上演曲本梗概』や、第 2 回来日公演時の番付など、ともに早稲田大学演劇博物館蔵）を展示した。また、1917 年に喜八郎が北京で初めて梅蘭芳の京劇を観て、感激して詠った狂歌（「天人の雲の台に舞の袖 かへすがえすもおもしろきかな」）が掲載されている書籍『支那劇と梅蘭芳』（早稲田大学演劇博物館蔵）を展示し、喜八郎と梅蘭芳との関係を紹介した¹⁰⁾。

本節では、喜八郎が帝国劇場の設立にも関わり、建物は太倉組が請け負っていたことも合わせて紹介した。また梅蘭芳の第 2 回来日公演は、関東大震災で被災後、改修された帝国劇場のこけら落としと、喜八郎の米寿のお祝い会をも兼ねていた。米寿祝賀会の資料として、喜八郎の趣味の一つである一中節が余興として行われたことが分かる「大倉男爵米寿祝賀会余興 一中節源氏十二段 筋書」（早稲田大学演劇博物館蔵）の他、「斎藤実宛大倉喜八郎書簡（米寿記念の詩文書墨贈呈）」（国会図書館憲政資料室蔵・斎藤実関係文書）、記念時計を展示した。

「3-3. 狂歌を詠む」では、狂歌に関わる資料を展示した。喜八郎は、和歌廼門鶴彦と号し、生涯を通して狂歌を詠んだ。新発田から上京後は狂歌を通じた人脈に助けられたことが指摘されている¹¹⁾。展示した『鶴之とも』は、限定 250 部、当時の印刷技術の最高峰を示す豪華な出版物であり装丁も見ごたえがあるが、多彩な名士が書画をよせていることも注目される¹²⁾。喜八郎の幅広い人脈も見取れる。また、狂歌「大業ハなせぬものなり小事とてゆるかせにしてかへり見ぬ人」は、1927（昭和 2）年 2 月 10 日付東京朝日新聞の大倉高商生を称賛する記事を読んだ喜八郎が立花校長宛に送った書簡（2 階に展示）にも添えられた狂歌である¹³⁾。本資料は喜八郎の物事に対する姿勢がよく表れた狂歌であること、かつ 2 階展示との関連性も持たせられることから展示資料として選択した。

2-4. 「4. 喜八郎が遺したもの」

本章は 2 節に分けて展示を行った。「4-1. 描かれた喜八郎」では、18 歳で江戸に出て、一代で大倉財閥を築いた喜八郎が、同時代の人々にどのように映っていたのか、多様な資料から示すことを目指した。「4-2. 晩年の奮闘、葬儀」では、晩年の活動を振り返り、1 階展

示の締めくくりとした。

「4-1. 描かれた喜八郎」では、喜八郎の社会的評価を物語る資料を展示した。「教育立身画之三『大倉喜八郎の豪胆』」は、1902（明治35）年、喜八郎が66歳の時、出版されたものである。この絵は、戊辰戦争の時、銃砲商の喜八郎が新政府軍に啖呵を切り商人としての心意気を見せたことで信用を得て、商談が成立したという逸話を描いたものとされる¹⁴⁾。商人としての喜八郎は、教育的に取り上げ得る、理想的な立身出世を遂げた人物と認識される面があったことが分かる。

「皇国雷名の諸君見立力競（ちからくらべ）」（国文学研究資料館蔵）は、1882（明治15）年に作られた錦絵である。内容は、この時期の各界の著名人を2人一組にして双方の首にひもをかけて引っ張り合っているという戯画である。これに喜八郎も伊藤博文と対になって描かれている。この関係性について村上勝彦氏から、伊藤博文と喜八郎はこの錦絵が描かれたころにはまだそれほど親しい間柄ではなく、政府の第一人者となった伊藤と組み合わせることで、政府・軍の用達としての喜八郎の存在感を示したものではないか、との指摘をいただいた。この錦絵からも喜八郎に対する当時の社会的評価の一端を見ることができる。

「帝国劇場 夜筵（やえん）次第」（早稲田大学演劇博物館蔵）は、1926（大正15）年4月30日、帝国劇場で催された喜八郎の同劇場会長の引退祝賀会（「夜筵」は夜宴の意か）の次第である。ここに余興として「明治の曙」が上演されたことが記載されている。この「明治の曙」は、銃砲商であった喜八郎の戊辰戦争の際の豪快なエピソードが基となっている。既述の「教育立身画之三『大倉喜八郎の豪胆』」と同様に、どんな相手でも信用を大切にする喜八郎の商人としての心意気が好ましいものと認識されていたことを示すものと考えられる。

当時の長者番付も2点展示した。長者番付は、見立番付（名物、流行地、役者などを、大関、関脇など相撲番付の上下によってランクづけする表現方法に倣って表示したもの）の一種である。長者番付の信頼性については、旧有力大名が欠落している等の問題点が指摘されているが¹⁵⁾、「同一時点での長者の存在状況を俯瞰できる」¹⁶⁾資料として研究に利用されている。

喜八郎が記載される長者番付は管見の限り【表1】の通りである¹⁷⁾。本展では、1877（明治10）年発行の「東京持丸長者鑑」（国文学研究資料館蔵、「前頭 大倉喜八」の記載あり）¹⁸⁾と、1886（明治19）年発行の「現今長者鑑」（国文学研究資料館蔵、「関脇 大倉喜八郎」の記載あり）を展示した。「長者」として世間に認識されていく状況を視覚的に示し得る資料と考え展示した¹⁹⁾。

「4-2. 晩年の奮闘、葬儀」では、晩年の喜八郎の活動とその死に関する資料を紹介した。「石黒忠恵（ただのり）受託 大倉鶴彦翁伝言」（東京経済大学寄託）は、喜八郎の死の22日前の1928（昭和3）年4月8日、生涯親しくしていた同郷人の石黒忠恵に口頭で預けた伝言を石黒が清書した、喜八郎の遺言書である²⁰⁾。

表 1 大倉喜八郎が記載される長者番付

資料名	出版年	番付位	居地	掲載名	所蔵先
大日本持丸鏡	明治 8 年	行司	東京	大倉屋喜八	国文学研究資料館
東京持丸長者鑑	明治 10 年	前頭	十軒店	大倉喜八	国文学研究資料館
大日本持丸長者鑑	明治 10 年 8 月改正	後見	東京銀座 2 丁目	大倉社英国 ロンドン大倉社	早稲田大学図書館
大日本持丸長者鑑	明治 12 年	盛大	東京	大倉喜八郎	早稲田大学図書館
大日本全国持丸鏡	明治 13 年	行司	東京	大倉屋喜八	国文学研究資料館
大日本改正持丸長者鑑	明治 13 年	唯新勉強	東京	大倉喜八郎	早稲田大学図書館
大日本持丸鏡	明治 15 年	(中央欄)		大倉喜八郎	国文学研究資料館
現今長者鑑	明治 19 年	閑脇	銀座二	大倉喜八郎	国文学研究資料館
大日本長者鏡	明治 21 年	今時盛熾	東京	大倉喜八郎	国文学研究資料館
方今長者鑑	明治 22 年	閑脇	銀座二	大倉喜八郎	国文学研究資料館
大日本金満家一覽鑑	明治 41 年	総後見		大倉喜八郎	国文学研究資料館

喜八郎は晩年、中国への事業経営に力を注いだ。そこで多くの人脈を築いた喜八郎に、葬儀の際、蒋介石など中国の要人から 91 本の弔旗が贈られ、葬儀場に飾られた。この弔旗は現在大倉集古館に収蔵されており、今回は張作霖からの弔旗を借用し展示した。この弔旗の寸法は縦 2300 mm×横 1520 mm と大きく、展示資料に平物や小さな資料が多い中、展示のアクセントとしても展示室内で重要な役割を果たしてくれた資料である（写真 5）。

最後に、大倉財閥の流れをくむ現代の企業をパネルで紹介した。喜八郎の実績と、それを支えた、信用を重んじ、世界への広い視野を持ちつつ、果敢に新しいことに挑戦するベンチャー精神が現代にも形を変えて受け継がれていることを紹介した。この喜八郎の精神は、学校創立の精神とも関わってくる。第Ⅰ部は、喜八郎の事績のみならず、学校創立ともかかわる喜八郎の精神を浮かび上がらせることを目的として展示を行い、第Ⅱ部の展示ともつながりを持たせることを意図した。

3. 第Ⅱ部 大倉商業学校から東京経済大学へ—記録と記憶でつづる 120 年—

第Ⅱ部は、東京経済大学の前身である大倉商業学校の創立から、大倉高等商業学校への昇格、戦時中の大倉経済専門学校への校名変更を経て、戦後、東京経済大学が開設され現在に至るまでを紹介した。歴史的な流れを追うだけでなく、生徒（学生）のレポートや日記、学校誌や学校新聞等へ掲載された記録など当時の学校生活を物語る資料を展示し、重層的に学校の歴史を紹介するよう試みた²¹⁾。学校の歴史は、在校生、卒業生、教員、職員、学校を取り巻くあらゆる人々によって残された記録と記憶で作られている、と考え、副題に「記録

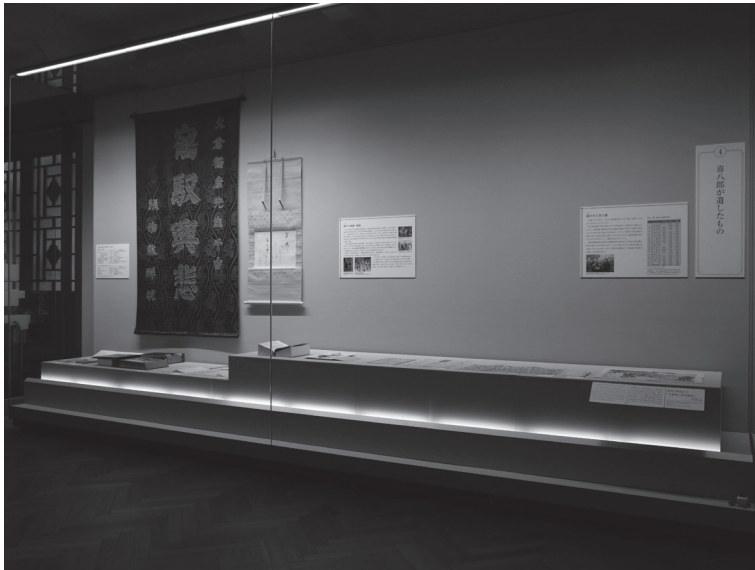


写真 5 弔旗（大倉集古館蔵）の展示

と記憶でつづる 120 年」と名付けた。また、第Ⅱ部展示の導入として、授業時間を知らせていた「鐘」と併せて、卒業アルバムに掲載の鐘のスケッチと詩をパネルにて掲示し、導入の展示とした。この中国で使われていたという「鐘」は喜八郎の蒐集品でもあり、卒業アルバムの記録からは、1950 年代前半までの使用が確認できる。喜八郎と学校の関係、そして学校生活を象徴する資料として第Ⅱ部の導入にふさわしい資料と考えて展示した（写真 6）。

次に、各章ごとに展示概要と展示資料について紹介する。

3-1. 「1. 大倉商業学校の時代」（1900～1910 年代）

本章は、大倉商業学校の創設への道のりと、建学の精神について紹介するとともに、大倉商業学校時代の資料を展示した。展示はさらに 3 節に分けて行い、1 節ごとに、A1 サイズのパネルを掲示した。パネルには、4～6 枚ほどの関連する写真を入れ込み、当時の学校や学校生活をイメージしやすくなるように努めた。

「1-1. 創設への道」では、条約改正により外国商人が国内で自由に活動できるようになったため、国内外で欧米人に伍する人材の育成が必要と考えた喜八郎が、石黒忠恵、渡辺洪基、渋沢栄一などの協力により、大倉商業学校を創設するにいたる経緯を紹介した。

「肖像 大倉喜八郎」は、1914（大正 3）年に大倉商業学校卒業の江原全秀氏が描いた油彩画である²²⁾。江原氏は終戦後、実業界を去って画家へ転身し、1955（昭和 30）年の日展に入選した。本学在学中の同級生として日本画家・山口蓬春がいる。

「1-2. 大倉商業学校の開校と建学の精神」では、1900（明治 33）年 9 月 1 日に開校した



写真 6 大倉集古館 2 階展示室（第Ⅱ部の展示）

大倉商業学校の概要と、「進取ノ気象」（ベンチャー精神）や忍耐，自助，努力，誠意などの建学の精神をテーマに展示を行った。

「鶴彦翁簡墨遺蹟集」（大倉集古館蔵）は，喜八郎と懇意にしていた中外商業新報（現日本経済新聞）の記者，佐藤新衛に送った喜八郎の狂歌（全 50 首あまり）と書簡を貼り合わせた巻物（全 2 巻）である。この中に，創立 20 周年に大倉高等商業学校の生徒に向けて詠まれた狂歌が所収されている²³⁾。この狂歌は，20 周年式典の際に色紙（印刷複製物）にして配布され，その複製の色紙のみが東京経済大学に所蔵されていた。今回の展示にあたり，大倉集古館にて資料調査を行った際，その元となった自筆の狂歌が新たに発見された。生徒に向けて詠まれたこの狂歌「自助 努力 誠意 幸福を授ける神やまもるらん 自助と努力と誠意ある人」は，喜八郎が大切にしてきた商人としての心得でもある²⁴⁾。

また，喜八郎が米寿を迎えた記念に，東京市養育院（生活困窮者や病人などの保護施設），大倉高等商業学校，大阪大倉商業学校，朝鮮の善隣商業学校，大倉集古館に，合計 100 万円を 4 年年賦で寄付したことを記した「寄付金目録」（大倉集古館蔵）を展示した。喜八郎は，教育以外の社会事業へも積極的に寄付を行っているが，展示では詳細に触れることができなかったため，この資料を通してその一端を紹介することを目指した。

「1-3. 実学教育と学校生活」では，大倉商業学校での具体的なカリキュラムや，学校生活に関わる資料を展示した。カリキュラムでは実学教育に力が入れられ，なかでも外国人と対等にビジネスを行うための語学（英語）教育に力点が置かれていた。これに関してはパネルによりカリキュラム表を掲示するとともに，当時の教科書（立花寛蔵編『最新 商業算術教

科書』や『商業地理教科書』などを展示した。

学校生活に関する資料として、夏休みの課題レポートもいくつか展示した²⁵⁾。

また、岸八郎氏（本科第2学年）筆「暑中休暇日記」は、夏季休暇中の課題であったと見られ、朱筆で評価（甲中）と丁寧なコメントが付されている。岸氏は1915（大正4）年本科卒業。日記は7月20日の夏休み直前の登校日に始まって、9月10日の夏休み最後の日で終わり、「いよいよ明日よりは学校へ行くのだ。いやな様で嬉しい」とある。夏休みの生徒の日常生活も知ることができる貴重な資料である。コメントには、「口語文語錯雑混乱セリ」などと記されているが、達筆で文章もしっかりしており、優秀さがうかがえる資料である。

『祝辞集（天）（地）』（「人」は夜学科に展示）は、1902（明治35）年11月に、喜八郎が勲三等・旭日中綬章を受けたことへの生徒による祝辞（直筆）をまとめたものである。「天」は本科1～3年の93名、「地」は予科1～2年生の193名のものである。本科は現在の高校生、予科は中学生ほどの年齢だが、達筆の上、難しい言いまわしをよく使いこなしている。『創立10周年記念号』で優秀な卒業生（本科第5回）として紹介されている当時予科1年生の小林理三郎氏のページを展示箇所とした。同じく小林氏筆の1906（明治39）年10月刊「満洲旅行日記」（『大倉商業学校校友会雑誌』第5号）を展示し²⁶⁾、一人の生徒に焦点を当てて資料を展示することで、複数の資料に関連性を持たせることを企図した。なお、『祝辞集』の「人」は夜学専修科の生徒の部となっている。『祝辞集』については、夜学科をテーマとした第2章第3節にて再度取り上げたい。

本節の最後に、「本科第1回卒業記念写真」（東京経済大学蔵）とパネル展示により、卒業の難しさと、このことが大倉商業学校の卒業生の質の高さにつながり、社会的に高い評価を得ていたことを紹介した。併せて、大倉商業学校の生徒を多く採用していた御木本幸吉（御木本真珠店・現ミキモトの創業者）の談話をまとめた「御木本幸吉氏の母校卒業生に対する好意」（『大倉商業学校同窓会会報』第2号）を展示した。この中で御木本は、採用者に求めるものとして、英語の心得をあげている。大倉商業学校の生徒が高い英語力を持っていると社会的に認識されていたことが分かる資料である。

これら実物資料の展示と合わせて、大倉商業学校の思い出を語った記事をパネルにし、紹介した。

以上、第1章では、大倉商業学校の創立から、学校生活、卒業後の進路に至るまでを展示を通して紹介した。

3-2. 「2. 大倉高等商業学校の時代（1920～30年代）」

本章では、1920（大正9）年4月、商業学校から高等商業学校へ昇格を果たしてから、1930年代までの、大倉高等商業学校（高商）の黄金期ともいえる、最も活動が盛んだったころの学校生活を3節に分けて紹介した。

「2-1. 高等商業学校への昇格と関東大震災」では、主に 1920 年代の学校生活にまつわる資料を、入学から卒業までの流れを意識して紹介した。併せて、関東大震災が学校生活に与えた影響についても紹介した²⁷⁾。

注目される資料は、1926（大正 15）年に高商を卒業した毛利晃雄氏による在学中の日々の出費メモ「こづかい帳」である。丁寧な書き込みから、当時の学生生活がうかがえる貴重な資料である。中でも、興味深いのは関東大震災時の記録である。例年通りであれば、9 月 10 日に夏休みが明けて授業が再開される予定であった。しかし、1923 年は 9 月 1 日に起こった関東大震災により大倉高商も甚大な被害を受けたため、10 月 15 日から麻布中学校の校舎を借りて授業が再開した。同年 10 月の記録には、16 日に東神奈川→品川、エビス→高田馬場、高田馬場→東神奈川、29 日に東京—イビス²⁸⁾、イビス—東神奈川、11 月 1 日に品川—有楽町、東京—田町、11 日に電車賃（13 円）、25 日に品川—神田、神田—東京、の切符代の記載が見られ、麻布中学校への通学に利用したと考えられる。この 10 月と 11 月以外は、回数券や定期券を購入していることから、赤坂葵町の校舎への通学には定期券や回数券を使用していたと推測される。12 月 1 日に定期券を購入する記載があり、赤坂葵町の校舎への通学が始まったことが読み取れる。これは、11 月末には焼失校舎を仮修繕して高商本科の授業が始まったこと²⁹⁾を裏付ける記載である。

1928（昭和 3）年 4 月、創立者の大倉喜八郎が死去する。ちょうどそのころ、関東大震災からの復興も一段落し、大倉高商が黄金期を迎える。「2-2. 大倉高商の発展—『大倉ボーイ』の時代—」では、1930 年代の活発な学校生活を主に展示した。

「大倉喜八郎葬儀時の学生代表の弔辞」は、喜八郎が没したとき、学生代表として、当時本科三年生だった野中敏男氏が読み上げた弔辞である。格調高い文章が美しい文字で書かれている（野中氏の直筆かどうかは不明）。この資料は、展示直前にご親族から寄贈された。学生にとって喜八郎が大きな存在であったこと、同時に喜八郎の事績において学校設立が学生に弔辞を読ませるほど代表的で重要なものであったことを示す、貴重な資料である。野中氏は当時組長も務めており、その任命状も併せて展示した。

学友会が結成され、部活動も盛んになった。「渋谷栄一宛大倉高等商業学校水泳部陸上競技部書簡（『映画と音楽の集ひ』開催通知と募金依頼）」（渋谷史料館蔵）は、大倉高商の水泳部と陸上競技部が渋谷栄一に送った書簡である。合同で「映画と音楽の集ひ」を開催するため、渋谷に後援（寄付）を願っている。渋谷の返事（案文）も同史料館に所蔵されており、多忙で参加できないが 30 円を送る、と返信している。この他にも、大倉高商の各部から渋谷に寄付を求める書簡が残っている。学友会に所属して予算の配分を受けつつ、様々な方法で自主的に活動費を捻出していた様子がうかがえる資料である。

「日記（二・二六事件の頃）」は、1938（昭和 13）年に高商を卒業した岡本茂和氏の在学中（1 年生から 2 年生）の日記帳である。1936 年 2 月 26 日から 29 日にかけて起こった二・

二六事件に当たる部分を展示した。26日当日、学校は試験期間中であったが自習日とされ、翌27日から試験が実施された。28日には、「戒厳令はいろいろきひしく、校門の所には土のうをおき、5・6人ゐた。皆武装してゐる。」と記されている。また、軍事教練に対する賞状も展示し、同時期に軍国主義が学校にも影響を及ぼし始めている状況を紹介した。

「2-3.『夜学の大倉』」では、大倉商業学校時代から「夜学の大倉」と呼ばれるほど人気があり社会的評価の高かった夜学科を取りあげた。

夜学科には、大倉組や第一銀行などで給仕をしながら、通学するものも多くいた。その一人として、戦後、理論社という出版社を創業した小宮山量平氏を紹介、小宮山氏の自伝的小説『千曲川』を展示し、大倉が夜学の名門であり社会的評価が高かったことを記すページを提示した³⁰⁾。

『祝辞集（人）』は、前掲の喜八郎への生徒による祝辞（直筆）をまとめた3冊のうちの1冊で、夜学専修科1～4学級³¹⁾の163名の祝辞をまとめている。名前や生年、出身地、士族・平民の別まで記されており、近世封建社会の身分制の名残が見て取れる。

『祝辞集』は開校から3年目の資料であり、創立初期の学校の状況を知ることができる貴重な資料である。また、通常、退学者のデータは残されていないため、卒業時には退学している生徒も含め1902年11月現在の在校生の情報を知ることができる点でも貴重である。

前述のように『祝辞集』には本科（天）93名、予科（地）193名の祝辞が収載されている。1902年度3月現在の在籍者数が、本科94名、予科196名であるので³²⁾、ほぼ在籍する生徒全員が祝辞を寄せたことが分かる³³⁾。夜学専修科については、在籍生徒262人³⁴⁾のうち163名が祝辞を寄せている。

163名の内訳は、四学級生24名、三学級生26名、二学級生69名、一学級生44名である³⁵⁾。平民と士族の割合は、平民108名、士族50名、記載なし5名で、また、在籍年齢は、最年少が14歳、最年長が28歳である³⁶⁾。平均年齢は18.33歳で、1910（明治43）年7月30日現在の夜学専修科の平均年齢「17.02強」³⁷⁾より高い。

出身府県は、北は岩手から南は沖縄まで34府県にわたる。東京府（市）が72名と最も多く、他はいずれも一桁である³⁸⁾。

3-3. 「3. 戦時下の学校（1930年代後半～1945年）」

戦況の悪化に伴い、労働力や兵力を補うため、学生も動員されることになり、学校生活に大きな影響を及ぼすことになった。

「戦時下の卒業証明書」は1944（昭和19）年9月に卒業した学生の卒業証明書である。学生の修業年限は1941（昭和16）年度に12月、翌年には9月と、二度にわたって短縮された。学校名が1944年に大倉経済専門学校に改称されたため、大倉高等商業学校の「高等商業」の部分が2重線で消され、「経済専門」に修正されている。また、1943年の「学業成績通知



写真 7 「3. 戦時下の学校 (1930 年代後半～1945 年)」の展示

書第 2 学年 1 学期」からは、英米との戦争中にも関わらず英語が 4 科目行われていることがわかる。

1940（昭和 15）年 12 月、学友会は解散し、報国団が結成された。従来の部活動は、鍛錬部・文化部などに再編成された。「大倉高商音楽班洋楽科 報国団結成第 1 回春季演奏会（プログラム）」は、報国団文化部の音楽班洋楽科による第 1 回春季演奏会のプログラムである。

戦時中に書かれたとみられる学生レポートが 90 点見つかった。ほとんどが 1943 年夏のものである。1 年生のものが 3 点、2 年生のものが 6 点、不明 3 点を除く 79 点が 3 年生のものである。レポートの中に「福田教授出題」とあるが、福田教授の課題レポートであったのか、学校の懸賞レポートに提出されたものなのかは不明である。本展では、この中から 3 点を選び展示をした。3 年生は 9 月に卒業し、その多くが出征したと見られる。

1943（昭和 18）年の学徒出陣では、日本人学生だけでなく、台湾や朝鮮半島出身の学生も志願制という形で徴兵された。大倉高商にも台湾出身学生が在籍しており、学徒出陣で出征している。張振傳は、台湾出身で、1942 年に大倉高商へ入学、2 年時に学徒出陣により出征し、学校へはがきを送っている。学徒出陣をした学生は、1943 年 11 月 20 日に仮卒業となっているが、その多くは 2 年生のため、本来の卒業は翌年 9 月になる。張振傳に関してはもう一枚はがきが残されており、吉田市太郎なる人物が張振傳の代わりに、本来の卒業証書がどうなるのかを学校側に問い合わせている。この 2 枚のはがきを展示した。学校側は、1944（昭和 19）年 9 月 12 日、〔学徒出陣により授与した仮卒業証書と引き換えに本証書を

授与する旨を保護者に連絡する文書〕を作成しているが、台湾出身の張氏には連絡が行き届かなかったのかもしれない。

他に、「富士電機株式会社宛古館校長書簡（案文）」を展示した。1944（昭和19）年、勤労動員されていた学生4名に対し、海軍予備学生として入隊するよう命令（9月20日付）が下された。そのため校長が学生の動員先に対し、8月20日に動員を解除するように願い出た書簡である。学生は中島正巳、神谷吉郎、稲垣忠男、太組修一の4名で、同年9月の卒業である。神谷は航空飛行予備学生となり、翌年6月の土浦海軍航空隊への空襲により戦死している。なお、神谷は卒業アルバムの編集委員でもあった。

また、大倉高商から東京商科大学（現・一橋大学）へ進学後、学徒出陣した学生についての調査結果をパネル展示した³⁹⁾。大倉高商の卒業生の中には、東京商科大学や慶應義塾大学などへ進学するものもいた。東京商科大学へは、1933（昭和8）年から1944（昭和19）年まで少なくとも27名が進学、9名が在学中のまま出征したことが確認された。

併せて、大倉高商の卒業生や在学中のまま出征した者で、判明した分（海軍飛行予備学生、海軍兵科予備学生）についてパネルで展示した⁴⁰⁾。

「3-2. 終戦と学校の再開」では、終戦後、残された校舎で学校が再開され、国分寺に移転する前までの関係資料を紹介した。1945（昭和20）年5月25日の空襲による校舎の被害報告（「戦災ニ依ル校舎焼失ニ関スル件報告（文部省専門局長宛）」）や、復員した学徒兵からの復学の問い合わせのはがき、敗戦後の混乱による通学難や生活難を訴えた「学生大会決議事項」などを展示した。

3-4. 「4. 東京経済大学の誕生（1946～1950年代）」

本章では、2節にわたり、国分寺への移転と新制大学への移行、その間の学生生活について紹介した。

「4-1. 国分寺への移転と新制大学への移行」では、学校が国分寺に移転し、1949年に新制大学に移行するまでの大倉経済専門学校時代の資料を紹介した。大倉経済専門学校の国分寺移転を決定した決議書（「校舎移転の決議書」）、「大倉経済専門学校学則」、1947（昭和22）年4月、大倉経済専門学校第二部および社会人教育をめざす付設別科が開設された際の時間表（「夜間部本科・別科時間表」）、「東京経済大学設置認可書」などを展示した。また、学園の復興と大学昇格のため、卒業生と在校生は積極的に寄付を行ったが、その寄付金の領収書（「復興資金と大学昇格基金への寄付金の受領証」）も展示した。

「4-2. 戦後の学生生活」では、国分寺キャンパスでの活気に満ちた当該期の学生生活に関わる資料を展示した。学生服や学帽、徽章、学生証、女子学生の入学（「学園と学生 女子学生座談会」）、学友会の復活を伝える資料（文芸部『雑草』創刊号、英語会シナリオ『While the Sun Shines』）、びっしりと書かれた講義ノート（『信用論』講義ノート）などを



写真 8 制服などの展示

展示した（写真 8）。また、当時の学生たちの学内紛争や学外の社会運動への関わりを示す資料（「渡辺輝雄教授不当解職問題をめぐって」「誓い（樺美智子さんの死に哀悼と不屈の闘いを誓う）」など）を紹介した。

3-5. 「5. 高度経済成長と大学（1950 年代後半～70 年代）」

高度経済成長期、「大学の大衆化」が進行する中、東京経済大学がどのように時代の変化に対応していったのか、その過程と当該期の学生生活について 2 節にわたり紹介した。

「5-1. 発展の礎—北澤・堀体制と教育環境の整備—」では、1957（昭和 32）年に就任した学長・北澤新次郎と理事長・堀久作の時代に行われた教育環境の整備（経営学部の設置「東京経済大学経営学部設置認可書」、新本館の建設「〔竣工記念パンフレット〕（東京経済大学新本館）」など）について取り上げた。

「5-2. 高度成長期の学生生活」では、研究・ゼミ活動の活発化の象徴として 1968（昭和 43）年の色川大吉ゼミによる五日市憲法草案の発見を取り上げた（東京都指定文化財「五日市憲法草案」個人蔵・あきる野市教育委員会寄託、千葉卓三郎写真など）。その他、1970（昭和 45）年のカリキュラム改定に関する資料（「カリキュラム改革案に寄せられた学生の意見」など）や、学園祭である葵祭のパンフレットなどを展示した。

3-6. 「6. 社会科学系総合大学への道（1980 年代～現在）」

本章では、地域社会との連携や、国際化が急速に進む中、社会の変化に対応するため、ど

のような改革を大学が行ってきたのかを振り返った。

「6-1. 時代と社会の要請に応じた改革」では、地域社会との連携を意識した活動（パンフレット「CARAVAN（1973年度）」、「第2回市民大学講座テキスト」）、変化する社会に対応した学部の新設（「コミュニケーション学部設置時のパンフレット」、「現代法学部設置認可書」）、国際化への対応（「北京対外貿易学院との学術教育交流に関する協定書」）などを紹介した。

「6-2. 21世紀の東京経済大学」では、21世紀に入り、グローバル化と多様化が進む社会に合わせて、様々な改革が行われたことを紹介した。新たな教育システムの導入（「TKUチャレンジシステム 2009ガイドブック」）、資格取得のサポート体制の充実（「2001年スタート資格取得支援キャリアサポート講座 パンフレット」）などについて展示した。また学生の活動として、災害救助ボランティア活動（『学生災害ボランティア派遣事業報告書』）や日銀グランプリの入賞（「日銀グランプリ最優秀賞盾」など）について取り上げた。さらに、コロナ禍が学校生活に与えた影響（対面での卒業式中止に当たって本学が出した新聞広告「本日、ここに集えなかったみなさんへ」）についても展示した。

最後に、「考え抜く実学。」の駅貼りポスターを展示し、現在の大学が目指す方向性を紹介した。

おわりに

東京経済大学創立120周年記念展示について、概要と展示資料、特に100周年記念展では取り上げられなかった資料について記した。本展の開館日数は全20日で、来館者は1900名であった。

来館者の方からは、「政商や武器商人といった喜八郎のイメージが変わった」、「学生時代は意識しなかった喜八郎を改めて近代日本への過渡期に活躍した人間と確認し、母校への思いが変化した」などのご意見があった半面、葵町から国分寺への移転については、それにまつわる夜学の変転も合わせて説明が不十分であること、キャプションの文字が小さく読みにくいといった指摘をいただいた。

展示内容、パネル、キャプション、冊子等については、村上勝彦氏、120年史専門委員会（戸邊秀明氏、大岡玲氏、堺野正一氏、杉本伸代氏、高井良健一氏、内藤隆夫氏、松永智子氏、安川隆司氏、米山高生氏）、史料室（二瓶司氏、谷脇由季子氏、友田昌宏氏、坂本寛氏、中村茉貴氏、平井真紀子氏）の皆様にご監修および分担執筆、データ処理等していただき出来上がったものである。それを今回拙稿にまとめさせていただいた⁴¹⁾。拙稿が東京経済大学の大学史研究に少しでも寄与できれば幸いである。

注

- 1) 村上勝彦「大倉喜八郎と大倉財閥の研究 1—家系と少年時代—」(『東京経大会誌—経済学—』No.287, 2015 年 12 月)
- 2) 村上勝彦「大倉喜八郎と大倉財閥の研究 2—出郷～鉄砲商—」(『東京経大会誌—経済学—』No.305, 2020 年 2 月)
- 3) 『大成建設社史』(1963 年 1 月, 大成建設株式会社)。この資料は、喜八郎ゆかりの新潟に所在する大成建設北信越支店に掲げられている。所蔵は本社。
- 4) 早稲田大学図書館所蔵の 1877 (明治 10) 年に発行された長者番付「大日本持丸長者鑑」には、「英国ロンドン大倉社」の記載があり、ロンドン支店開設が大倉組の売りの一つだったことがうかがえる。この資料については、実物資料が借用できず、展示スペースの問題でパネル展示も難しかったため、展示をすることができなかった。
- 5) 大倉集古館を開設する理由として、喜八郎は「維新当時から 50 年にわたって蒐集してきた多数の文化財を公共に寄付し、永久に保存するため」とする(『稿本 大倉喜八郎年譜 [第 3 版]』2012 年 3 月, 東京経済大学)。これは個人コレクションが寄附され展示・保存される欧米の博物館の考え方と同じであり、欧米視察旅行にて実際に見聞し、欧米の先進的な博物館論にも通じていたからと考えられるのではないか。先進的な欧米の考えを柔軟に取り入れ、果敢に挑戦する喜八郎のベンチャー精神が大倉集古館の設立にも感じられる。ただし欧米視察旅行ではウィーン万国博覧会を見学した記録のみで、他の博物館施設等を見学していたかどうかは不明である。
- 6) 『稿本 大倉喜八郎年譜 [第 3 版]』(前掲注 5)
- 7) 江戸幕府第 12 代将軍家慶 (いえよし) 作「海上日の出図」の喜八郎筆の由緒書きには、1894 (明治 27) 年 3 月に葵町の自邸完成を記念しての宴の折、有栖川宮熾仁親王から贈られたとある。また、軸の表装や上箱は将軍家から渡されたままであること、子孫はこの貴重品を永く珍藏すべきことも記されている。
- 8) この作品は、1918 (大正 7) 年に東京帝国大学の関野貞が、大倉集古館のために北京の骨董店で入手したものとされる。
- 9) 本節は、村上勝彦「古典文芸をめぐる日中文化交流—演劇・書物を中心に、大倉喜八郎の関わりにもふれて—」(『東京経済大学学術研究センター年報』特別号「中国と日本 新たな時代を見据えて」2017 年 3 月) を基に喜八郎と梅蘭芳の関わりを中心に構成した。
- 10) 『支那劇と梅蘭芳』(1919 年, 玄文社) は中国通ジャーナリストの村田烏江 (うこう) が海外で最も早く梅蘭芳を紹介した本である。
- 11) 村上勝彦「大倉喜八郎と大倉財閥の研究 2—出郷～鉄砲商—」(前掲注 2)
- 12) 喜八郎の喜寿を祝った書・歌・詩文・挿絵などをまとめた本書の作者には、政財界の名士 (徳川慶喜・山県有朋・松方正義・井上馨・寺内正毅、渋沢栄一・三井八郎右衛門高棟・岩崎久弥・安田善次郎・益田孝など) だけでなく、文化界の名士 (跡見花蹊・幸田露伴・徳富蘇峰など)、中国の名士 (孫文・袁世凱など) が含まれる。
- 13) 『東京経済大学八十年史』(1986 年 3 月, 東京経済大学)
- 14) 村上勝彦「大倉喜八郎と大倉財閥の研究 2—出郷～鉄砲商—」(前掲注 2)
- 15) 阿部武司「明治前・中期における富豪たち—『長者番付』の検討を中心に—」(『日本経済の発展と企業集団』1992 年 2 月, 東京大学出版会)

- 16) 宮本又郎「幕末・明治期における企業家の栄枯盛衰」(日本の近代11『企業家たちの挑戦』, 1999年3月, 中央公論新社)
- 17) 明治30年代以降は, 多くの長者番付に記載されるようになるため, 本稿では割愛した。
- 18) 『稿本 大倉喜八郎年譜 [第3版]』(前掲注5) 居地の十軒店は大倉屋銃砲店の所在地である。慶応4年5月, 銃砲店大倉屋の店舗を神田和泉橋通りから日本橋十軒店に移転している。
- 19) 喜八郎が記載される最初の長者番付は, 1875(明治8)年のもので, 紙面中央の行司部分に記載されている。紙面は, 東西を分ける中央の「柱」に, きまって, 「為教訓」「為御覧」などと, 相撲番付の「蒙御免」に代わる表現が大きく描かれ, その下に, 行司, 頭取, 世話, 差添, 勧進元(本)などが鎮座して, そこには価値判断をするにふさわしい人物・団体・商店などの名や, 誰しもがそうであろうと認める事物名が認められていて, その内容の正確性と信用性を高める工夫がなされているのが普通である, と指摘されている(青木美智男編『番付集成』2009年10月, 柏書房)。逆に, 自身の信頼性を高めるために番付を利用することもあったと見られ, 明治10年8月改正「大日本持丸長者鑑」の「大倉社」「英国ロンドン大倉社」の記載をみると, 一種の広告とも見受けられる。紙面中央の行司等に名を連ねていても, 社会的に喜八郎がどれほど認知されていたかを知るのは難しい。明治6年に大倉組商会の設立, 明治7年には陸軍用達を務め, 大規模な土木建築工事を請け負うなど, 事業を順調に拡大していった時期ではある。
- 20) 村上勝彦「大倉喜八郎と大倉財閥の研究2—出郷—鉄砲商—」(前掲注2)
- 21) 大倉商業学校時代は生徒, 大倉高等商業学校時代以降は学生という言葉を使用した。
- 22) 『東京経済大学新聞』第93号(1955年11月5日)で「後世に残る絵を描きたい」と喜八郎の肖像画と, 後掲の堀久作の肖像を描いたと語っている。
- 23) 「鶴彦翁簡墨遺蹟集」(大倉集古館蔵)には学校関連の狂歌として「教育を孕(はら)みて建る学ひ屋は有為の士をも生み出すらむ」も所収されている。1908(明治41)年11月, 韓国漢城(現・ソウル)で善隣商業学校の開校式が行われた。その時に喜八郎が詠んだ狂歌である。修業年限2年(後に3年)の本科が開校し, 翌年には夜学専修科も開設された。
- 24) この資料は時代的には創立20周年, 大倉高等商業学校に昇格した年のものであり, 本来であれば, 次章に展示されるべきものであったが, 建学の精神にも通じる喜八郎の生徒に伝えたい思いが記された資料であったため, 第1章に展示をした。
- 25) 「関東並ニ奥羽ノ内陸交通系ニヨリ運搬セラル、商品ノ種類」(明治43年暑中休暇中実地調査事項報告書)(東京経済大学蔵)には, 朱筆で「The most laborious and painstaking work」(最も面倒で骨の折れる仕事)とのコメントが付いている。日常的に英語が使用される環境にあったことも伺える。
- 26) 日露戦争の勝利によって日本が満洲南部に勢力を拡大したため, 全国の中等学校以上を対象にした満洲・朝鮮旅行を日本政府が計画した。大倉商業学校生徒も参加し, これは, その時の小林氏の旅行記である。早稲田大学や東京高等商業学校などとの合同旅行であったが, 現地では学校単位で行動したようである。また, 『校友会雑誌』(1904年創刊)は, 部活動などを支える校友会(教職員・生徒・学校法人役員が会員)の会誌であることも合わせて紹介した。
- 27) 本章で展示・紹介した稲垣知雄氏の資料は別稿にて検討する。
- 28) 資料に「イビス」と記載される。恵比寿駅のことと思われる。また, 駅間の「一」「→」の記号も記載のままである。

- 29) 『東京経済大学の 100 年』(2005 年 5 月, 東京経済大学)
- 30) 1920 年代後半, 小宮山氏は尋常小学校卒業後, 第一銀行で給仕をしながら夜学専修科に通学した。夜学科は勤労学生が多いため, 労働運動に関わる左翼思想・運動が盛んであった。小宮山氏自身も左翼運動に身を投じ, 大倉商業学校を中退した。後に東京商科大学(現・一橋大学)に進学している。
- 31) 夜学専修科は修業年限について「夜学専修科二箇年とす。但し夜学専修科ハ壹ヶ年ヲ二年级トス。」とある。
- 32) 『東京経済大学八十年史』(前掲注 13)
- 33) 『祝辞集(地)』からは予科生の氏名が分かるため, 卒業者名簿から予科から本科へ進学し本科を卒業した者が特定できる。1902 年 11 月の時点の 2 年生は 1901 年 9 月入学者である。予科卒業者数は 69 名, うち 45 名が本科を卒業している(卒業年度は複数年度にわたる)。予科卒業者の進学先が同校本科とは限らないため, 二学年に関して言えば, 予科卒業者の本科卒業率はより高い水準にあったといえる。また, 予科卒業者の多くは本科へ進学したと推測される。対して, 1902 年 11 月の時点で, 一学年は, 予科卒業者 77 名に対し, 本科卒業者は 27 名であり, 二学年より大幅に卒業率が下がる。本科卒業の難しさや他学への進学, 就職などのため, 予科から本科への進学率自体が下がった可能性はあるが推測の域を出ない。また, 一学年で 1 人, 二学年で 2 人, 夜学専修科を卒業している。予科卒業後は本科だけでなく夜学専修科へ進学する者もいたことが分かる。
- 34) 夜学専修科の在籍者数は, 明治 36 年 2 月卒業の 24 名を 3 月現在の在籍者数(238 名)に足したものの。
- 35) 夜学専修科は大倉商業学校規則に「夜学専修科二箇年トス。但シ夜学専修科ハ壹ヶ年ヲ二年级トス」とある。
- 36) 年齢内訳は以下の通り。

14歳	15歳	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	28歳
11	19	23	25	16	18	13	7	8	7	7	1	2	2	1

- 37) 『東京経済大学八十年史』(前掲注 13)
- 38) 出身地内訳は, 岩手 1, 宮城 2, 秋田 2, 福島 6, 茨城 5, 栃木 1, 群馬 4, 埼玉 7, 千葉 2, 東京府(市) 72, 神奈川 3, 新潟 4, 富山 1, 石川 1, 福井 2, 長野 2, 岐阜 1, 静岡 4, 愛知 4, 三重 1, 滋賀 1, 大阪府 2, 和歌山 2, 島根 2, 岡山 1, 山口 5, 徳島 1, 愛媛 3, 佐賀 1, 長崎 1, 熊本 2, 大分 3, 鹿児島 4, 沖縄 1。
- 39) 『一橋会会員名簿』(社団法人東京商科大学一橋会), 卒業アルバム等のデータによる。米山高生氏(東京経済大学経営学部教授)のご尽力により, 一橋大学学園史資料室, 一橋大学いしぶみの会世話人代表竹内雄介氏の多大なご協力をいただき調査を進めることができた。
- 40) 『東京経済大学八十年史』(前掲注 13)
- 41) 120 年史専門委員会委員及び史料室職員は展示開催当時のもの。委員名は委員長である戸邊氏以降 50 音順とした。また史料室元職員の檜皮瑞樹氏、大庭裕介氏にも多大なご協力をいただいた。

【展示資料リスト】

番号	資料名／作品名	作者／制作(技法)等	制作年／発行年	所蔵先
第1部 大倉喜八郎, その生涯と業績				
1	大倉鶴彦翁夫妻像	高村光雲, 高村光太郎合作	1927(昭和2)年	大倉集古館蔵
1. 喜八郎 出立する				
1-1. 新発田から江戸へ				
2	丹羽伯弘 自画自賛	丹羽伯弘	1842(天保13)年	新発田市立歴史図書館蔵
3	積善堂塾則	丹羽伯弘	1824(文政7)年3月27日	新発田市立歴史図書館蔵
4	木牌		江戸時代後期～大正時代	新発田市立歴史図書館蔵
5	『傳習録』上・中・下巻	王陽明, 南部保城編	1910(明治43)年	東京経済大学蔵
6	御出京の動機			鈴木英介氏蔵
1-2. 乾物店の開店と鉄砲商への転身				
7	『心学先哲叢集』	大倉喜八郎	1860(万延元)年	東京経済大学蔵
8	『狂歌扶桑名所名物集』上野国	檜園梅明選	1859(安政6)年	東京経済大学蔵
9	『狂歌扶桑名所名物集』武蔵国	檜園梅明選	1859(安政6)年	東京経済大学蔵
10	『狂歌弓張月』上・下巻	絵馬屋選	1861(文久元)年	東京経済大学蔵
11	瑞西九十番スーベル君借用金証書		1871(明治4)年11月17日	新発田市立歴史図書館蔵
12	米預手形事		1871(明治4)年11月17日	新発田市立歴史図書館蔵
13	大倉組銃砲店広告		1892(明治25)年10月	東京経済大学蔵
14	わたりきし浮世の橋のあと見れば 命にかえて あやふかりけり	大倉喜八郎	1920(大正9)年	大倉集古館蔵
2. 喜八郎 起業する				
2-1. 大倉組商会の設立				
15	大倉喜八郎ヨリ千里丸積入物品調査上申(展示期 間:10/3～11 ※1)		1874(明治7)年7月	国立公文書館蔵
16	蕃地必需物件大倉喜八郎笠野熊吉下命ノ儀(展示 期間:10/13～25)		1874(明治7)年7月	国立公文書館蔵
17	開物成務	伊藤博文	1896(明治29)年6月	大成建設蔵
18	大倉組土木株式会社の印はんでん		1924(大正13)～1946(昭和21)年	大成建設蔵
2-2. 海外への事業展開				
19	寺島宗則宛上野景範書簡		1872(明治5)年6月29日	国立国会図書館憲政 資料室(寺島宗則関係 文書)蔵
20	倫敦支店支配人辞令書	合名会社大倉組	1898(明治31)年4月9日	東京経済大学蔵
21	倫敦支店支配人手当証明書		1898(明治31)年4月9日	東京経済大学蔵
22	ロンドン支店支配人門野重九郎への命令書	大倉喜八郎	1898(明治31)年4月9日	東京経済大学蔵
23	釜山浦に大市開設許可願(大倉喜八郎外8名)	大蔵省	1877(明治10)年6月	国立公文書館蔵
24	井上馨宛大倉喜八郎書簡		1895(明治28)年3月7日	国立国会図書館憲政資料 室(井上馨関係文書)蔵
25	門野重九郎宛大倉喜八郎自筆書翰		1919(大正8)年10月21日	大倉集古館蔵
2-3. ベンチャー精神と事業の多角化				
26	札幌麦酒醸造場払下げ命令書		1886(明治19)年11月30日	国立公文書館蔵
27	「大倉組札幌ビール醸造場図」		1886(明治19)年頃	サッポロビール博物館蔵
28	麦酒醸造場引継目録		1886(明治19)年12月1日	サッポロビール博物館蔵
29	麦酒貯蔵用水伐採の儀について		1886(明治19)年12月19日	サッポロビール博物館蔵

東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」について

30	約定書【複製】		1887(明治20)年12月24日	サッポロビール博物館蔵
31	大倉組時代のラベル【複製】		1886(明治19)年頃	サッポロビール博物館蔵
32	札幌麦酒株券		1899(明治32)年12月1日	サッポロビール博物館蔵
33	銀座通りの電気燈	歌川重清	1883(明治16)年	電気の史料館蔵
34	重役俸給支払帳		1907(明治40)年6月	株式会社ニッピ蔵(東京経済大学寄託)
35	献立(大倉組五社新年宴会晩餐会)		1930(昭和5)年1月10日	東京経済大学蔵
36	祇園閣模型	坂本甚太郎	1928(昭和3)年頃	大倉集古館蔵
3. 文化愛好家として				
3-1. 美術収集家・大倉集古館の設立				
37	大倉邸之図(創立当初の大倉集古館及び大倉邸)		1902(明治35)年	大倉集古館蔵
38	大倉邸美術館内之図(創立当初の大倉集古館内装)		1902(明治35)年	大倉集古館蔵
39	萩に虫螺鈿象嵌火鉢		1897~1898年(明治30~31)年	大倉集古館蔵
40	鶴彦翁愛用煙草入・煙管		大正時代	大倉集古館蔵
41	盤龍石硯		2~3世紀(中国・後漢時代)	大倉集古館蔵
42	海上日の出図	徳川家慶	江戸時代後期	大倉集古館蔵
43	《海上日の出図》由緒書き	大倉喜八郎	1894(明治27)年3月	大倉集古館蔵
3-2. 日中の文化交流―梅蘭芳への支援―				
44	『梅蘭芳上演曲本梗概』		1919(大正8)年	早稲田大学演劇博物館蔵
45	大正8年5月狂言 番組		1919(大正8)年	早稲田大学演劇博物館蔵
46	『支那劇と梅蘭芳』	村田島江	1919(大正8)年	早稲田大学演劇博物館蔵
47	大正13年帝国劇場 番付		1924(大正13)年	早稲田大学演劇博物館蔵
48	大倉男爵米寿祝賀会余興「一中節源氏十二段 筋書」		1924(大正13)年10月	早稲田大学演劇博物館蔵
49	斎藤実宛大倉喜八郎書簡(米寿記念の詩文書墨贈呈)		1925(大正14)年9月7日	国立国会図書館憲政資料室(斎藤実関係文書)蔵
50	米寿金婚記念の銀時計	服部時計店	1924(大正13)年	東京経済大学蔵
3-3. 狂歌				
51	鶴彦翁(大倉喜八郎)印	蘆野楠山, 天池居士 澁ほか	1925(大正14)~1928(昭和3)年頃	大倉集古館蔵
52	『鶴乃とも』	田辺浩編	1916(大正5)年2月4日	東京経済大学蔵
53	大業ハなせぬものなり小事とて 遊るかせに てかへり見ぬ人	鶴彦(大倉喜八郎)	1927(昭和2)年頃	東京経済大学蔵
4. 喜八郎が遺したもの				
4-1. 描かれた喜八郎				
54	教育立身画之三「大倉喜八郎の豪胆」	中嶋石松	1902(明治35)年	国文学研究資料館蔵
55	帝国劇場 夜延次第「明治の曙/歌まくら」	松居松翁, 半井桃水	1926(大正15)4月30日	早稲田大学演劇博物館蔵
56	皇国雷名の諸君見立力競	正久	1882(明治15)年	国文学研究資料館蔵
57	東京持丸長者鑑	永島虎重, 多賀甚五郎	1877(明治10)年	国文学研究資料館蔵
58	現今長者鑑	児玉又七編	1886(明治19)年	国文学研究資料館蔵
4-2. 葬儀と遺言				
59	「大倉喜八郎赤石岳登山時作成狂歌」(『鶴友会々報』第9号)	鶴友会, 橋本鐵男	1926(大正15)年10月25日	東京経済大学蔵
60	三井高保 大倉喜八郎両名ニ授爵ノ栄典ヲ与ヘラ レタキ旨總理大臣ヨリ宮内大臣へ通牒		1915(大正4)年11月12日	国立公文書館蔵
61	隠居許可証		1927(昭和2)年1月5日	東京経済大学寄託
62	襲爵被仰付		1927(昭和2)年1月7日	東京経済大学寄託

63	石黒忠恵受託 大倉鶴彦翁伝言(封筒付き)	石黒忠恵	1928(昭和3)年7月8日	東京経済大学寄託
64	張作霖からの「弔旗」		1928(昭和3)年	大倉集古館蔵
65	『大倉喜八郎葬儀 写真帖』乾・坤		1928(昭和3)年	東京経済大学蔵
66	感涙のうた(絶筆)	大倉喜八郎	1928(昭和3)年4月8日	大倉集古館蔵
67	『時鳥集』	鶴友会	1930(昭和5)年5月	東京経済大学蔵
68	『努力』	大倉喜八郎	1916(大正5)年	東京経済大学蔵
第2部 大倉商業学校から東京経済大学へ—記録と記憶でつづる120年—				
1. 大倉商業学校の創設—東京経済大学のはじまり—				
69	授業時間を知らせる鐘		1739(元文4)年	東京経済大学蔵
1-1. 創設への道				
70	肖像 大倉喜八郎	江原全秀／油彩, キャンバス	1950(昭和25)年頃か	東京経済大学蔵
71	『貿易意見書』	大倉喜八郎	1886(明治19年)年4月	東京経済大学蔵
72	「居貿易と出貿易」(『新日本』第6巻第10号)	大倉喜八郎	1916(大正5)年10月1日刊	東京経済大学蔵
73	『還暦銀婚之記』(大倉商業学校創立の主意)	田辺浩	1898(明治31)年12月15日刊	東京経済大学蔵
74	「大倉氏邸に於ける演説」(『太陽』第4巻第13号)	伊藤博文	1898(明治31)年5月23日刊	東京経済大学蔵
75	新撰東京名所図会(『風俗画報』第37編)		1903(明治36)年1月25日刊	東京経済大学蔵
76	石黒忠恵宛渋沢栄一書簡	渋沢栄一	1900(明治33)年12月13日	国立国会図書館憲政資料室蔵
77	【重要文化財】大倉商業学校設置認可交付の件【複製】	文部省	1900(明治33)年7月9日	東京都公文書館蔵
1-2. 大倉商業学校の開校と建学の精神				
78	自助 努力 誠意(『鶴彦翁簡墨遺蹟集』)	大倉喜八郎	1920(大正9)年頃	大倉集古館蔵
79	教育を孕(はら)みて建る学ひ屋は 有為の士をも生み出すらむ(『鶴彦翁簡墨遺蹟集』)	大倉喜八郎	1907(明治40)年	大倉集古館蔵
80	小谷野敬三 家族写真(『大倉商業学校教員写真集』)		〔1911(明治44)年〕	東京経済大学蔵
81	辞令(報酬月65円支給)	大倉商業学校	1909(明治42)年1月9日	東京経済大学蔵
82	大倉商業学校出講許可の件	大倉商業学校	1901(明治34)年5月3日	東京経済大学蔵
83	書簡(授業日時につき別紙を確認されたし)	〔大倉商業学校〕	1901(明治34)年8月21日	東京経済大学蔵
84	寄付金目録	大倉喜八郎	1925(大正14)年	大倉集古館蔵
85	遅刻入場許可願		1918(大正7)年	東京経済大学蔵
1-3. 実学教育と学校生活				
86	『祝辞集』天	大倉商業学校	1902(明治35)年11月	東京経済大学蔵
87	『祝辞集』地	大倉商業学校	1902(明治35)年11月	東京経済大学蔵
88	「満洲旅行日記 小林理三郎」(『大倉商業学校校友会雑誌』第5号)	小林理三郎	1906(明治39)年10月刊	東京経済大学蔵
89	小林理三郎(写真)(『創立満10周年記念号』)	大倉商業学校校友会	1910(明治35)年10月23日	東京経済大学蔵
90	『最新 商業算術教科書』第1巻	同文館	1904(明治37)年3月5日刊	東京経済大学蔵
91	『商業地理教科書』	普及舎	1903(明治36)年2月12日刊	東京経済大学蔵
92	レポート「関東並ニ奥羽ノ内陸交通系ニヨリ運搬セラル、商品ノ種類」	今井正根(本科4学年)	〔1910(明治43)年〕	東京経済大学蔵
93	レポート「輸出絹布に就て」	神戸光吉(本科4学年)	1910(明治43)年	東京経済大学蔵
94	レポート「酒類につき」	橋本昇, 松下健太郎, 浅川鎮高	〔1910(明治43)年頃〕	東京経済大学蔵
95	暑中休暇日記	岸八郎(本科第2学年)	1913(大正2)年	東京経済大学蔵
96	暑中休暇日記	岸八郎(本科第3学年)	1914(大正3)年	東京経済大学蔵

東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」について

97	岸八郎の卒業記念写真(向かって左側)		1915(大正4)年	東京経済大学蔵
98	本科第1回卒業記念写真	大倉商業学校	1904(明治37)年4月5日	東京経済大学蔵
99	「御木本幸吉氏の母校卒業生に対する好意」(『大倉商業学校同窓会会報』第2号)	大倉商業学校	1911(明治44)年3月11日刊	東京経済大学蔵
2. 大倉高等商業学校の時代				
2-1. 高等商業学校への昇格と関東大震災				
100	【重要文化財】高等商業学校への組織変更申請書【複製】		1919(大正8)年3月28日	東京都公文書館蔵
101	卒業アルバム・大倉商業学校(『第21回卒業記念写真帖一』)	大倉商業学校	1923(大正12)年3月	東京経済大学蔵
102	卒業アルバム・大倉商業学校(『第21回卒業記念写真帖二』)	大倉商業学校	1923(大正12)年3月	東京経済大学蔵
103	「入学試験」(『大倉高商で学んだこと』)	毛利見雄	2000(平成12)年7月	東京経済大学蔵
104	大倉高等商業学校学則抜萃及入学志願者心得	大倉高等商業学校	1929(昭和4)年	東京経済大学蔵
105	大倉商業時代・自筆講義ノート(倫理学・染村教授, 工業・後閑講師)	岡本茂和	1935~1938(昭和10~13)年	東京経済大学蔵
106	〔大倉商業時代・自筆講義ノート(経済・経済原論・商業通論, 第一学年)〕	岡本茂和	1935~1936(昭和10~11)年	東京経済大学蔵
107	京都・東京等スケッチ11(1922-5/26 校庭)	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年5月26日	世田谷美術館蔵
108	関東大震災時スケッチ「大倉高商」	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1923(大正12)年9月	世田谷美術館蔵
109	洪沢栄一宛阪谷芳郎書簡(震災関係, 震災後の復興方針に係る「上申書」同封)	阪谷芳郎	1923(大正12)年9月20日	洪沢史料館蔵
110	こづかい帳	毛利見雄	1923(大正12)年4月~ 1926(大正15)年3月	東京経済大学蔵
111	1922-6/7 SS.Alabama丸にて	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月7日	世田谷美術館蔵
112	1922-6/7 海外旅行団団長Alabama Marin上ノ読書	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月9日	世田谷美術館蔵
113	1922-6/14 香港松原別館ノ窓ヨリ	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月14日	世田谷美術館蔵
114	天草丸デッキパッセンジャー 6/18	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月18日	世田谷美術館蔵
115	1922-6/22 台北台湾高等商業学校附近	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月22日	世田谷美術館蔵
116	1922-6/24 台南にて	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月24日	世田谷美術館蔵
117	安平ニテ 6/24	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月24日	世田谷美術館蔵
118	1922-6/26 総督府	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月26日	世田谷美術館蔵
119	台北 1922-6/24	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月26日	世田谷美術館蔵
120	1922-6/26 台北博物館	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月26日	世田谷美術館蔵
121	台北 江山楼より 1922-6/25	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年6月25日	世田谷美術館蔵
122	7/1 京都ニテ 東一条通り精華女学校	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年7月1日	世田谷美術館蔵
123	京都御所 7/1 寺町御門	稲垣知雄／水彩, 鉛筆, 紙	1922(大正11)年7月1日	世田谷美術館蔵
124	〔集合写真・南洋旅行団解散ニ先キ立テ, 於基隆記念撮影〕		1922(大正11)年6月26日	東京経済大学蔵
125	天草丸(甲板客船)	稲垣知雄／木版, 紙	1922(大正11)年6月18日	世田谷美術館蔵
126	猫の夜行	稲垣知雄／木版, 紙	1960(昭和35)年	東京経済大学蔵
127	『交通広告資料』	大倉高等商業学校・ 広告研究会	1930(昭和5)年2月25日刊	東京経済大学蔵
128	『広告研究』第1集	大倉高等商業学校・ 広告研究会	1930(昭和5)年12月刊	東京経済大学蔵
129	卒業証書		1926(昭和元)年3月29日	東京経済大学蔵
130	立花寛蔵宛大倉喜八郎書簡	大倉喜八郎	1927(昭和2)年2月14日	東京経済大学蔵
2-2. 大倉高商の発展―「大倉ボーイ」の時代―				
131	『大倉鶴彦翁最後の訓話』	大倉喜八郎	1928(昭和3)年1月9日刊	東京経済大学蔵
132	絵はがき 〔大倉高等商業学校創立30周年記念〕	〔大倉高等商業学校〕	1930(昭和5)年	東京経済大学蔵

133	大倉喜八郎葬儀時の学生代表の弔辞		1928(昭和3)年4月28日	東京経済大学蔵
134	組長任命書	〔大倉高等商業学校〕	1928(昭和3)年4月	東京経済大学蔵
135	創立30周年記念祭式次第	〔大倉高等商業学校〕	1930(昭和5)年	渋沢史料館蔵
136	『大倉学会雑誌』創刊号	大倉高等商業学校・大倉学会	1928(昭和3)年12月刊	東京経済大学蔵
137	『商業経済研究』第1号	大倉高等商業学校・経済研究会	1926(大正15)年12月刊	東京経済大学蔵
138	『東亜事情研究』創刊号	大倉高等商業学校・東亜事情研究会	1925(大正14)年3月1日刊	東京経済大学蔵
139	『大倉高商新聞』創刊号	大倉高等商業学校・新聞部	1928(昭和3)年4月刊	東京経済大学蔵
140	『貝塚』(『大倉高等商業学校新聞』記事原稿集)	柳川香一編	1935(昭和10)年	東京経済大学蔵
141	メダル 大倉高等商業学校・端艇部		1925(大正14)年	東京経済大学蔵
142	メダル 大倉高等商業学校・漕艇部		1940(昭和15)年	東京経済大学蔵
143	メダル 大倉高等商業学校・校友会柔道部		1933(昭和8)年	東京経済大学蔵
144	メダル 大倉高等商業学校・柔道部		1928(昭和3)年	東京経済大学蔵
145	メダル 大倉高等商業学校・剣道部		1933(昭和8)年	東京経済大学蔵
146	渋沢栄一宛大倉高等商業学校水泳部陸上競技部書簡(「映画と音楽の集ひ」開催通知と募金依頼)	大倉高等商業学校・水泳部, 陸上競技部	1931(昭和6)年6月	渋沢史料館蔵
147	大倉高商水泳部・陸上競技部主催 「映画と音楽の集ひ」パンフレット	大倉高等商業学校・水泳部, 陸上競技部	1931(昭和6)年6月20日	渋沢史料館蔵
148	『葵水会会報』	大倉高等商業学校・葵水会	1932(昭和7)年9月刊	東京経済大学蔵
149	『葵丘文芸』第42号	大倉高等商業学校・文芸部	1928(昭和3)年12月13日刊	東京経済大学蔵
150	『英語会会報』第3号	大倉高等商業学校・英語会	1935(昭和10)年刊	東京経済大学蔵
151	第17回発表演奏会プログラム	大倉高等商業学校・マンドリン部	1933(昭和8)年6月11日	東京経済大学蔵
152	秋季演奏会曲目	大倉高等商業学校・管楽部	1927(昭和2)年11月20日	東京経済大学蔵
153	昭和五年末ノ本校紛擾事件顛末報告書	川口西三	1931(昭和6)年2月10日	東京経済大学蔵
154	日記(二・二六事件の頃)	岡本茂和	1936(昭和11)年	東京経済大学蔵
155	学生手帳(大倉高等商業学校)	辻孝八郎	1940(昭和15)年	東京経済大学蔵
156	賞状(学年間終始一貫教練出場, 熱心精励)	大倉高等商業学校	1941(昭和16)年3月10日	東京経済大学蔵
157	善隣商業学校 内地修学旅行日程表		1937(昭和12)年	東京経済大学蔵(大倉財閥資料)
158	大阪大倉商業学校規則	大阪大倉商業学校	1932(昭和7)年1月	東京経済大学蔵(大倉財閥資料)
159	生徒ノ左傾思想取締ニ関スル件	文部省専門学校局長 粟屋謙	1926(大正15)年5月13日	東京経済大学蔵
160	『大倉高商学報』102号	大倉高等商業学校・学報部	1938(昭和13)年1月25日刊	東京経済大学蔵
2-3. 夜学と勤労学生				
161	『祝辞集』入	大倉商業学校	1902(明治35)年11月	東京経済大学蔵
162	〔大倉商業学校夜学専修科 第1回卒業記念写真〕	大倉商業学校	〔1903(昭和28)年3月〕	東京経済大学蔵
163	〔大倉高等商業学校夜学中等科(普通科) 第1回卒業記念写真〕	大倉高等商業学校	1926(昭和元)年3月	東京経済大学蔵
164	校友会費領収証(金10銭)	大倉高等商業学校中等科専修科校友会	1940(昭和15)年12月6日	東京経済大学蔵
165	『校友会報』創刊号	大倉高等商業学校中等科専修科校友会	1933(昭和8)年3月25日	東京経済大学蔵

東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」について

166	メダル 大倉高等商業学校・中等科柔道部		1934(昭和9)年	東京経済大学蔵
167	メダル 第6回芸芸大会・大倉高等商業学校・中等科校友会		1936(昭和11)年	東京経済大学蔵
168	『山岳部報』第7号	大倉高等商業学校中等科専修科校友会	1936(昭和11)年11月25日刊	東京経済大学蔵
169	『千曲川』	小宮山量平	1997(平成9)年7月刊	東京経済大学蔵
170	〔夜学科生徒への校内巡視強化について〕	川口西三	1931(昭和6)年5月14日	東京経済大学蔵
171	はがき(大倉高等商業学校附設中等科を東京大倉商業学校へ名称変更の通知)	東京大倉商業学校	1943(昭和18)年3月	東京経済大学蔵
3. 戦時下の学校				
3-1. 戦時下の学生生活				
172	卒業証明書	古館市太郎	1944(昭和19)年10月13日	東京経済大学蔵
173	学業成績通知書第2学年2学期	大倉高等商業学校	1943(昭和18)年3月10日	東京経済大学蔵
174	今夏季ニ於ケル学校報国隊ノ勤労協力ニ関スル件	大倉高等商業学校	1943(昭和18)年11月2日	東京経済大学蔵
175	大倉高商音楽班洋楽科 報国団結成第1回春季演奏会(プログラム)	〔大倉高等商業学校〕	1941(昭和16)年	東京経済大学蔵
176	南方華僑論	西田晃哉	1943(昭和18)年	東京経済大学蔵
177	南方主要鉱業論	小澤長三郎	1943(昭和18)年	東京経済大学蔵
178	大東亜石炭論	井口要之助	1943(昭和18)年	東京経済大学蔵
179	〔今次聖戦戦没者慰霊祭挙行の件〕	大倉高等商業学校	1943(昭和18)年10月12日	東京経済大学蔵
180	慰霊祭次第(今次聖戦戦没者慰霊祭)	〔大倉高等商業学校〕	1943(昭和18)年10月12日	東京経済大学蔵
181	臨時徴兵検査判定調査送付の件	大倉高等商業学校	1943(昭和18)年12月7日	東京経済大学蔵
182	はがき(台湾出身出征兵からの照会)	張振傳	1944(昭和19)年1月31日	東京経済大学蔵
183	はがき(教務課宛吉田市太郎筆)	吉田市太郎	1944(昭和19)年	東京経済大学蔵
184	〔学徒出陣により授与した仮卒業証書と引き換えに本証書を授与する旨を保護者に連絡する文書〕	大倉高等商業学校	1944(昭和19)年9月12日	東京経済大学蔵
185	富士電機株式会社宛古館校長筆書簡の下書き	古館市太郎	1944(昭和19)年7~8月頃	東京経済大学蔵
3-2. 終戦と学校の再開				
186	戦災ニ依ル校舎焼失ニ関スル報告(文部省専門局長宛)	〔大倉高等商業学校〕	1945(昭和20)年6月11日	東京経済大学蔵
187	はがき(復員学徒兵による復学に関する問い合わせ)		1945(昭和20)年	東京経済大学蔵
188	入学志願者心得(陸海軍諸学校出身者及在学者等の転校又は編入学)と受験票	〔大倉高等商業学校〕	1945(昭和20)年10月	東京経済大学蔵
189	学生大会決議事項		1946(昭和21)年2月22日	東京経済大学蔵
4. 東京経済大学の誕生				
4-1. 新しい大学へ一國分寺への移転と新制大学への移行一				
190	校舎移転の決議書		1946(昭和21)年1月20日	東京経済大学蔵
191	『大倉経専学報』復刊第1号	大倉経済専門学校	1946(昭和21)年末刊	東京経済大学蔵
192	夜間部本科別科時間表	〔大倉経済専門学校〕	1947(昭和22)年5月	東京経済大学蔵
193	復興資金と大学昇格基金への寄付金の受領証	大倉経済専門学校	1947(昭和22)年4月2日	東京経済大学蔵
194	東京経済大学設置認可書	文部省	1949(昭和24)年3月28日	東京経済大学蔵
195	東京経済大学短期大学部 入学志願者心得(昭和32年度)	東京経済大学	1956(昭和31)年	東京経済大学蔵
196	進学適性検査	〔東京経済大学〕	1950(昭和25)年	東京経済大学蔵
4-2. 「新しい大学」での学生生活と学内対立				
197	学生服		年代不明	東京経済大学蔵
198	学帽		1960年代	東京経済大学蔵
199	東京経済大学時代の帽子の徽章	〔東京経済大学〕	〔1955(昭和30)年頃〕	東京経済大学蔵

200	大倉高等商業学校時代の帽子の徽章とベルトのバックル			東京経済大学蔵
201	学生証(経済学部第1部経済学科・第4年次・山浦暁夫)	1957(昭和32)年4月1日発行		東京経済大学蔵
202	「学園と学生 女子学生座談会」(『東京経済大学新聞』第87号)	1955(昭和30)年6月5日		東京経済大学蔵
203	While the Sun Shines(英語会シナリオ)	〔東京経済大学〕・英語部	1950年代前半	東京経済大学蔵
204	『雑草』創刊号	大倉経済専門学校・文芸部	1947(昭和22)年1月	東京経済大学蔵
205	『社研』第1号	東京経済大学・社会科学研究会	1951(昭和26)年1月	東京経済大学蔵
206	『大倉会計』創刊号	東京経済大学・会計学研究会	1952(昭和27)年7月	東京経済大学蔵
207	経済学概論	東京経済大学・渡辺輝雄	1950年代	東京経済大学蔵
208	信用論(講義ノート)	小日向允	1950年代前半	東京経済大学蔵
209	学科目配当表(第一学部)	〔東京経済大学〕	1951(昭和26)年度	東京経済大学蔵
210	渡辺輝雄教授不当解職問題をめぐって	〔東京経済大学〕	1952(昭和27)年	東京経済大学蔵
211	誓い(樺美智子さんの死に哀悼と不屈の闘いを誓う)	東京経済大学全学集会	1960(昭和35)年6月16日	東京経済大学蔵
212	新安保条約にたいする反対声明	東京経済大学教授団	1960(昭和35)年2月24日	東京経済大学蔵
213	全学一致で六月四日安保阻止統一行動に参加しよう(ピラ)	東京経済大学教授団, 教職員組合, 学生自治会, 消費生活協同組合	1960(昭和35)年5月31日	東京経済大学蔵
214	72国会デモに立ち上げ そして新しい局面を切り開こう(ピラ)	東経大マルクス研究会	1960(昭和35)年7月1日	東京経済大学蔵
5. 大学の発展とゼミ活動				
5-1. 発展の礎―北澤・堀体制と教育環境の整備―				
215	肖像 堀久作	江原全秀／油彩, キャンバス	1950年代前半	東京経済大学蔵
216	東京経済大学経営学部設置認可書	文部省	1964(昭和39)年1月25日	東京経済大学蔵
217	〔募金活動への協力願〕	染村亀鶴, 塚本文治	1959(昭和34)年1月	東京経済大学蔵
218	感謝状(東京経済大学新本館建設への寄附に対して)	東京経済大学	1960(昭和35)年4月1日	東京経済大学蔵
219	〔竣工記念パンフレット〕(東京経済大学新本館)	東京経済大学	1959(昭和34)年4月7日竣工	東京経済大学蔵
5-2. ゼミ活動の活発化と学生生活				
220	【東京都指定文化財】五日市憲法草案(深沢家文書)(10/13以降は複製を展示 ※2)	千葉卓三郎	1881(明治14)年	個人蔵(東京都あきるの市教育委員会寄託)
221	『葵ゼミナール論叢』創刊号	東京経済大学ゼミナール連合会	1964(昭和39)年4月	東京経済大学蔵
222	カリキュラム改革案に寄せられた学生の意見		1970(昭和45)年	東京経済大学蔵
223	1970年度学科目一覧表(『学修指導書』)			東京経済大学蔵
224	〔葵祭 パンフレット〕	東京経済大学	1960(昭和35)年ほか	東京経済大学蔵
225	領収証(国会請願運動へのカンパ)		1969(昭和44)年6月28日	東京経済大学蔵
226	12.3大衆団交に総結集を		〔1970(昭和45)年12月3日〕	東京経済大学蔵
6. 社会科学系総合大学への道				
6-1. 時代と社会の要請に応じた改革				
227	CARAVAN(1973年度)	東京経済大学文化会キャラバン隊実行委員会	1973(昭和48)年ほか	東京経済大学蔵
228	CARAVAN(1976年度)	東京経済大学文化会キャラバン隊実行委員会	1976(昭和51)年	東京経済大学蔵

東京経済大学創立 120 周年記念展示「東京経済大学 120 年と創立者大倉喜八郎」について

229	CARAVAN(1980年度)	東京経済大学文化会 キャラバン隊実行委 員会	1980(昭和55)年	東京経済大学蔵
230	第2回市民大学講座テキスト	国分寺市教育委員会, 東京経済大学	1983(昭和58)年	東京経済大学蔵
231	北京対外貿易学院との学術教育交流に関する協定書		1984(昭和59)年	東京経済大学蔵
232	大倉記念学芸振興会の活動を彩った学術講演会・ 芸術公演の数々		2018(平成30)年1月	東京経済大学蔵
233	コミュニケーション学部 開設時のパンフレット	東京経済大学	1995(平成7)年	東京経済大学蔵
234	現代法学部設置認可書	文部省	2000(平成12)年	東京経済大学蔵
6-2. 21世紀の東京経済大学				
235	TKUチャレンジシステム 2009ガイドブック	東京経済大学	2008(平成20)年5～6月	東京経済大学蔵
236	2001年スタート資格取得支援キャリアサポート 講座 パンフレット	東京経済大学	2001(平成13)年	東京経済大学蔵
237	『学生災害ボランティア派遣事業報告書』	東京経済大学	2012(平成24)年1月24日	東京経済大学蔵
238	第7回日銀グランプリ最優秀賞盾	日本銀行	2011(平成23)年12月3日	東京経済大学蔵
239	第14回日銀グランプリ最優秀賞盾	日本銀行	2018(平成30)年	東京経済大学蔵
240	第15回日銀グランプリ最優秀賞盾	日本銀行	2019(令和元)年	東京経済大学蔵
241	「本日、ここに集えなかったみなさんへ」	朝日新聞	2020(令和2)年3月23日	東京経済大学蔵
242	「考え抜く実学」ポスター	東京経済大学	2019年	東京経済大学蔵

※ 1：文書内に朱筆があり，展示期間が限定されたため，会期中に同簿冊中にて展示替えを行った。
 ※ 2：東京都指定文化財のため，展示期間が限定されたことから，会期中に複製へ展示替えを行った。